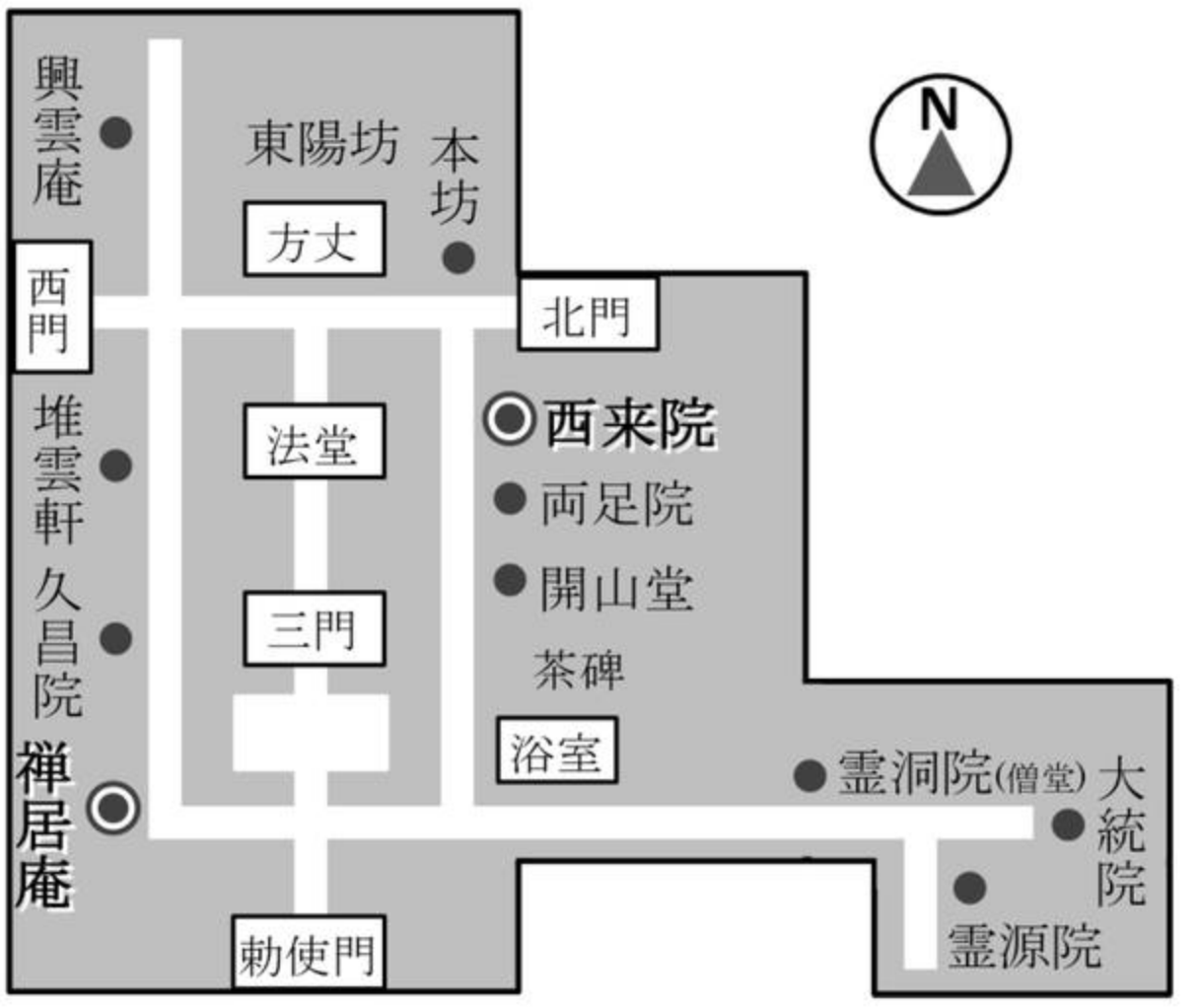
作品紹介 □

第一〇三回書展に御来場頂き、ありがとうございます。
今回は「西来院」と「禅居庵」の二会場にて書展を開催致しております。両会場共に御高覧頂ければ幸いです。

〜 西来院　作品 〜



一、岡本清二
臨書　楷書　貫名　海屋『山田公雪冤碑』　半切
「誠信所感、長利後裔。鑑斯貞珉、昭無他志。」
初めての臨書作品です。硬さの中にも伸びのある感じに惹かれて書いてみました。初心者なので、荒い所が多いかもしれませんが、うまく表現できているでしょうか？



二、木谷亮太
臨書　行書　王羲之『蘭亭序』　半切
「若合一契未嘗不臨文嗟悼不能喩之」
あまり深く考えず取り組んだ蘭亭序ですが、構成に苦労した上、づかいの拙さを露呈してしまいました。しかし、これを通して良い験をしたと思っています。



三、春木光平
創作　調和体　『心にある花を咲かせよう』　半切1／2
「凛　心にある花をいつまでも咲かせよう」
力強く地面に根を張る一輪の花が見えました。



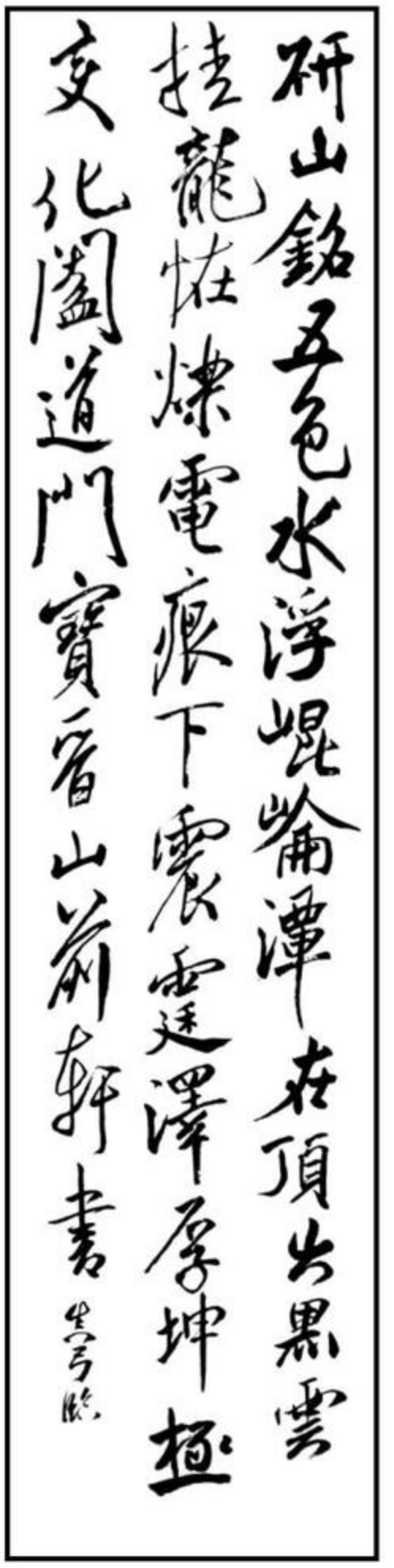
経筆

四、水谷慈
臨書　隷書　『木簡』　半切
「始建國天鳳元年玉門大煎都兵完堅折傷薄」
木簡です。新しい筆がすごく手に馴染んで、始筆・終筆・線の引き方など、慣れない筆使いも楽しかったです。右払いでは思いっきり筆が開いてくれて、満足のいく線になりました。木簡の雰囲気が出せていたら嬉しいです。



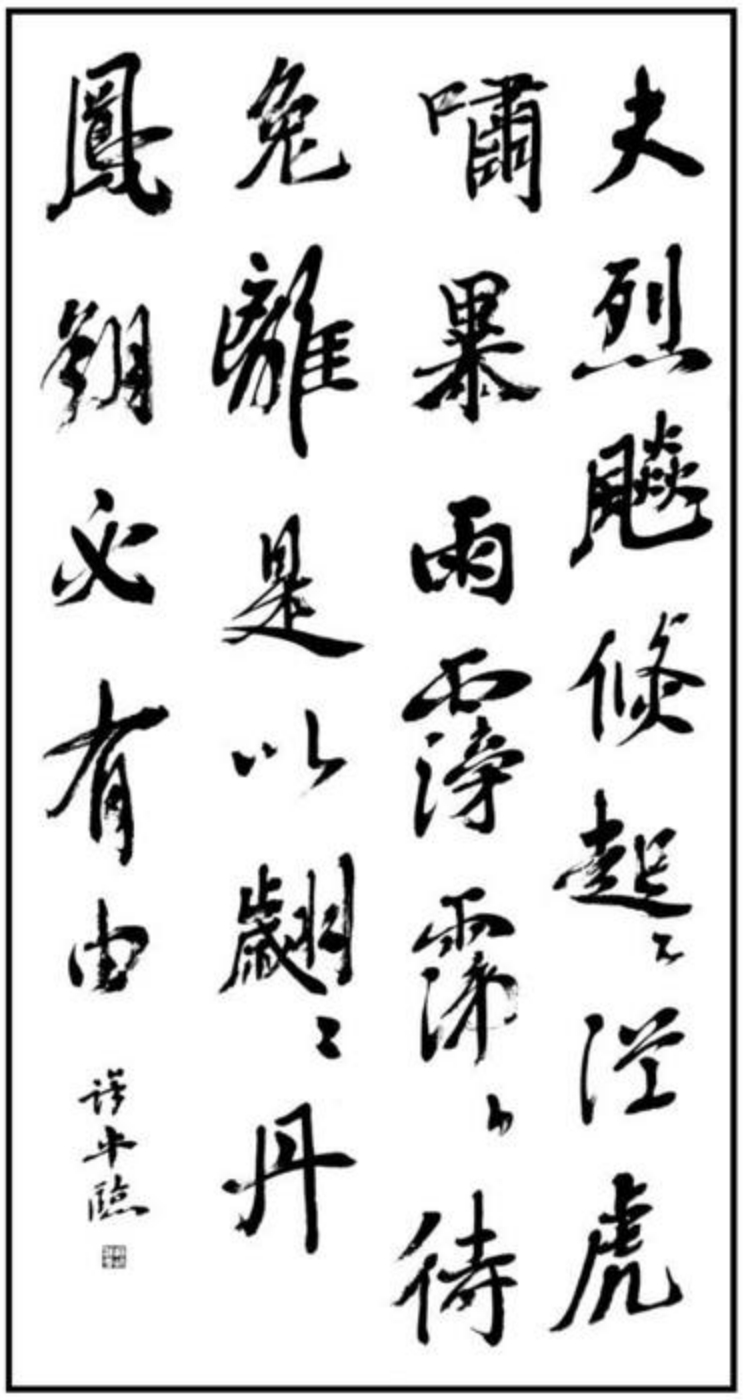
五、横山成基
臨書　楷書　褚遂良『楷書千字文』　全紙
「樂殊貴賤禮別尊卑上和下睦夫唱婦随外受傅訓入奉母儀諸姑伯叔猶子」
結局練習不足のまま出品することとなってしまいましたが、自分の書に対する姿勢を見直すいい機会になりました。今後は皆に負けないよう頑張っていこうと思います。



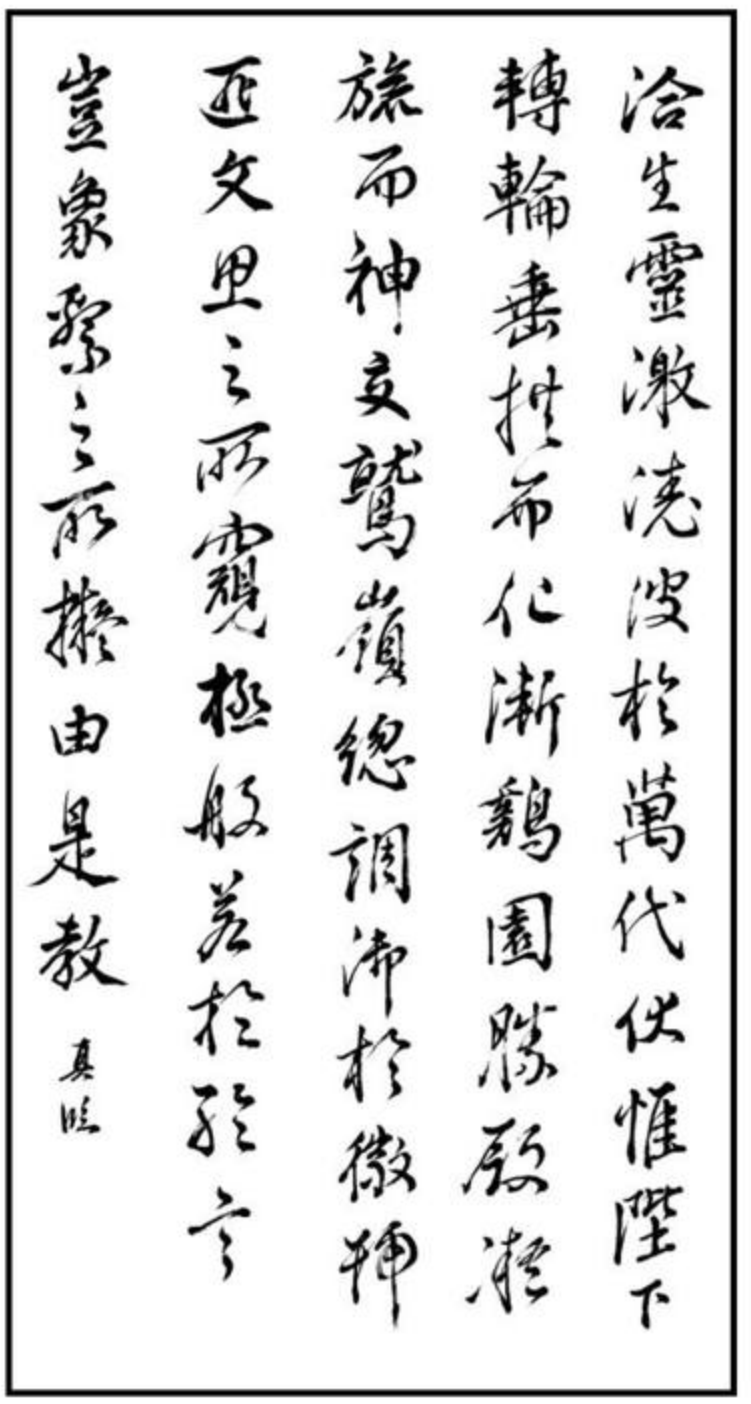

研山銘五色水浮嵕崙潭在頂出黒雲
挂龍怪鑠電痕下震霆霓澤厚坤極
文化閨道門寶晉山前軒書

六、平川真弓
臨書　行書　米芾『研山銘』　2尺×8尺
「研山銘。五色水浮　崙在頂出黒雲。挂龍怪鑠電痕。下震霆
澤厚坤。極變化閨道門。宝晉山前軒書。」
久しぶりに書いたもので、大きな作品に取り組んだのは
二回目です。自分ではまとめられず、色々なアドバイスを
貰うことで、自分では意識していない点に気が付きました。
これからも作品作りを通してもっと学んでいきたいと思
います。

七、江崎洋平
臨書　行書　空海『聾瞽指帰』　全紙
「夫烈颺倏起々従虎嘯暴雨　霈々待免離是以翽々丹鳳翔必有
由」
全紙初作品となりました。以前から、三筆に数えられる空
海の書を臨書しよう、と思っていましたが構成に悩まされま
した。なんとか仕上げることができましたが、空海の書の奥
深さを思い知らされました。


夫烈颺倏起々従虎
嘯暴雨霈々待
免離是以翽々丹
鳳翔必有由

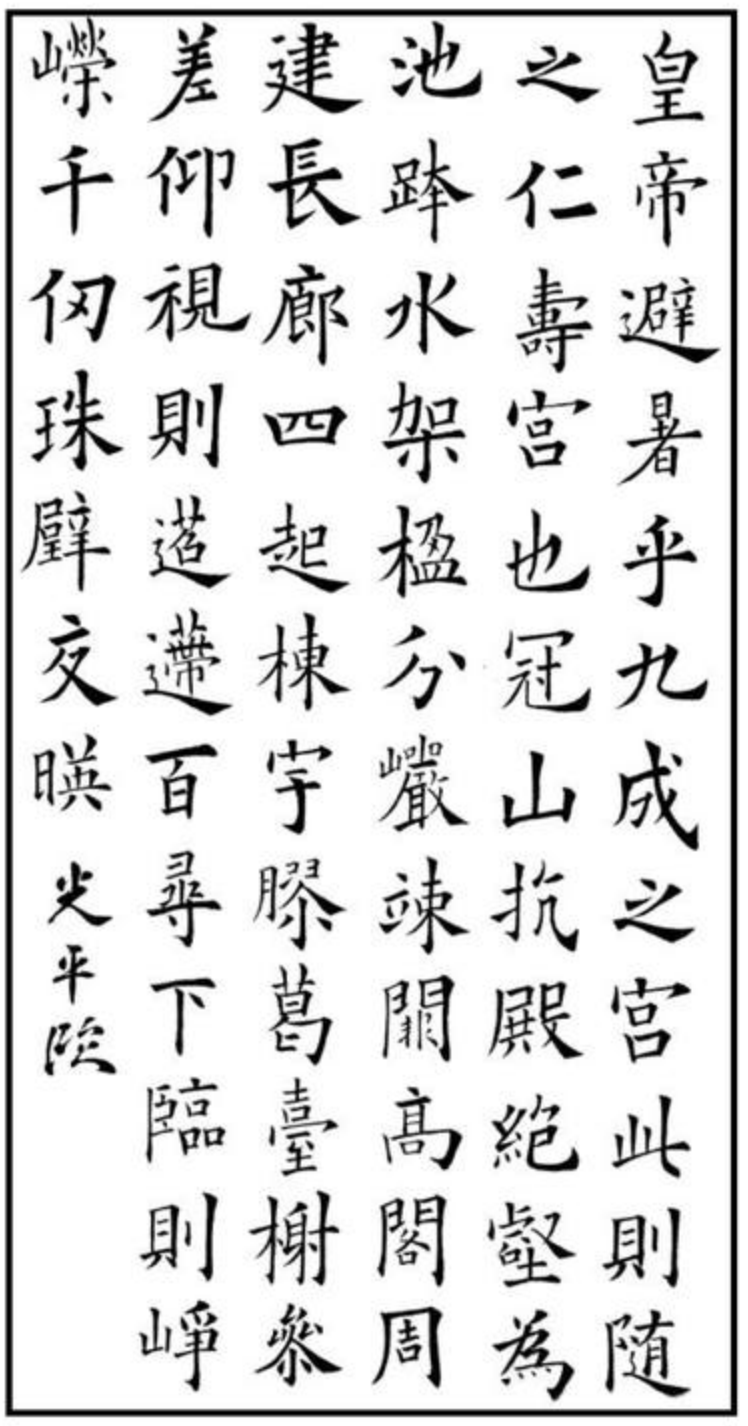
八、肥後真
臨書　行書　董其昌『菩薩蔵経後序』　全紙
「洽生靈激澆波於萬代伏惟陛下轉輪垂拱而化漸鷄園勝殿凝旒而神交鷲嶺總調御於徽號匪文思之所窺極般若於輪言豈象繫之所擬由是教」
初めての全紙作品です。これ位の字数が私には合っているのかもしれません。



九、上野敬峰
臨書　隷書　何紹基『臨張遷碑』　半切
「有張仲以孝友為行披覧詩雅煥知」
隷書や楷書は上手な人に任せようと思った、そんな作品です。



十、春木光平
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　全紙
「皇帝避暑乎九成之宮。之則随之仁壽宮也。冠山抗殿。絶壑爲池。跨水架楹。分巖竦闕。高閣周建。長廊四起。棟宇膠葛。壹榭參差。仰視則迢遞百尋。下臨則崢嶸千仞。珠璧交暎。」
入部当初から憧れていた古典です。多字数の作品はただでさえ一枚仕上げるのに時間がかかります。特に僕の場合、書く前に法帖を何度も見返しイメージトレーニングをしてから挑むので非常に時間がかかります。ですが、その分古典に触れる時間が多く、完成した作品に愛着が湧きます。これも楷書を書く醍醐味の一つだと僕は実感しています。



一一、頓部李歩子
創作　楷書・行草書　張継『楓橋夜泊』　半切二連
「月落烏啼霜満天江楓漁火対愁眠」
自分の好きな古典をもとに創作しました。まだまだ未熟な部分が多いですが，「創る」楽しさがわかってきました。



一二、窪田頌

模刻　篆刻　『漢印三顆』　半紙

「漢委奴国王」　「武平君璽」　「汝南尉印」

篆刻しようと思ったので、先ず初めに篆刻の基本である漢印を三つほど模刻してみました。それぞれ『武平君璽』は前漢初期、『汝南尉印』は前漢後期、『漢委奴国王』は後漢初期の印で、雰囲気が違うのですがそこまで表現できたでしょうか。ただ漢印の深さに触れただけでも成果かもしれません。三つ全て石の種類を変えてもみたので、その点でも大きな経験になりました。







一三、春木光平

臨書　隷書　『西狭頌』

２尺×８尺

「漢武都太守漢陽阿陽李君。諱翕。字伯都。天姿明敏。敦詩悦醴。膺祿美厚。繼世郎吏。幼而宿衛。弱冠典城。有阿鄭之化。是　三　符守。致黄龍嘉禾木蓮甘露之瑞。」

いろんな隷書古典に浮気して辿り着いたこの『西狭頌』。“戻ってきた”の方が正しいかな？実は前回書展で初めて臨書した隷書作品として臨書してます。その時とはまた違う雰囲気を持つものになりました。御批評宜しくお願いします。



一四、吉田幸広
臨書　行書　文徴明『行書千字文巻』　半切
「天地玄黄。宇宙洪荒。日月盈昃。辰宿列張。寒來暑往。秋収冬藏。閏餘成歳。律呂調」
文徴明は「努力の人」であり、若い頃書は下手であったが、努力して学び、祝允明、唐寅、徐禎卿と並んで「呉中四才子」と称された。彼は学生時代、他の学生が遊び回っている間も毎日千字文を十本ずつ臨写して腕を上げたと言われる。少しは見習いたいものです…。

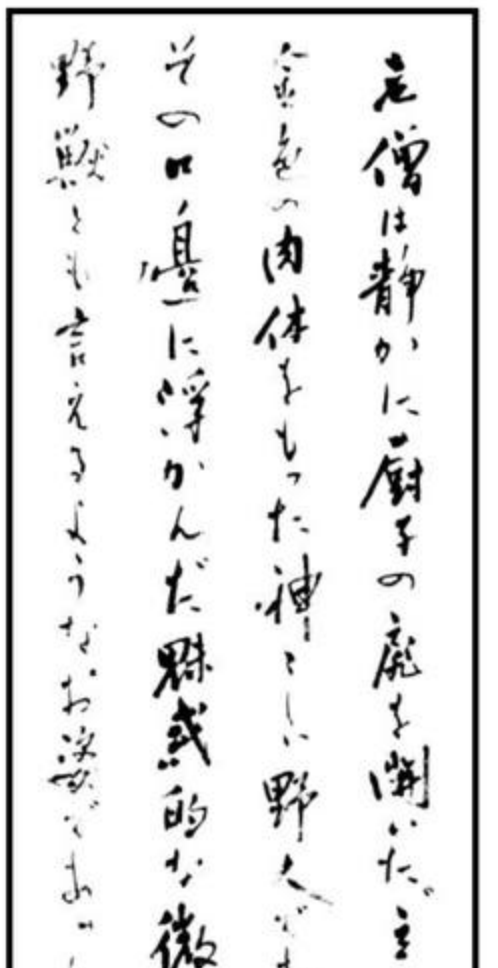


一五、久田喜朗
臨書　行書　顔真卿『争座位稿』　半切
「百寮之師長。諸侯王者人臣之極地。今僕射挺不朽」
線の流れを意識して書きました。顔真卿らしさは出ているでしょうか？ご批評宜しくお願いします。



一六、小島千明
臨書　行書　米芾『苕溪詩巻』　半切
「白雪詠更度采菱謳縷會玉鱸堆案団金」
行書に挑戦しました。難しかったです。





一七、中川真理子
臨書　調和体　斑鳩宮『詩』　2尺×8尺
「老僧は静かに厨子の扉を開いた。立ち現れた救世観音はくすんだ黄金色の肉体を持った神々しい銀杏形の眼と分厚い唇、その口邊に浮かんだ魅惑的な微笑というよりはむしろ野獣とも言えるようなお姿であった。」
初めての二八作品です。縦書きでバランスよく書くのに苦労しましたが、調和体の作品のまとめ方について色々と学ぶことができ、楽しかったです。これからも様々な作品に挑戦していきたいです。

一八、北山聡佳
創作　草書　『唐詩二首』　2尺×8尺
「江路東連千里潮　青雲北望紫微遙　莫道巴陵湖水闊　長沙南畔更蕭條　衆鳥高飛盡　孤雲獨去閒　相看兩不厭　只有敬亭山」
普段は仮名作品を好んで練習していますが、今回は、漢字に挑戦しました。中国の有名な書家・王鐸の草書をイメージし、行の揺れや筆画の柔らかさと重厚さの表現を試みました。ご批評の程、宜しくお願いいたします。





一九、河合直樹
創作　草書　『人事を尽くして天命を待つ』　2尺×8尺
「盡人事待天命：胡寅『読史管見』（宋代の儒学書）」
「ベストを尽くせ、さらば道は開かれん。」
大学生活を送る中で身に沁みて感ぜられたのは、興味を抱いた物事に「ベストを尽くす」ことは（対象の如何を問わず）人生を切り拓く端緒となる、ということ。ただし”命あっての物種”ですから過度の尽力にご用心。

二〇、西原英臣
臨書　草書　傅山『五言律詩軸』　2尺×8尺
「风磴吹阴霜云門吼曝泉酒醒思臥簟衣冷欲装綿野老来多客河魚不取銭只疑濠朴処自有一山川」
今回も傅山の作品を臨書してみました。書けば書くほど作品の中から色んな事を学ぶ事ができ、大変勉強になりました。これからも明・清の時代の条幅を色々と書き、学んでいきたいと思います。





二一、上野敬峰

臨書　行書　趙孟頫『前後赤壁賦』　2尺×8尺

「奉匏尊以相属寄蜉蝣於天地」

二八を二行で書くと決めてからというもの、筆選びから労苦の道は始まりました。大変難産だった割には愛着も弱い部分もありますが、今の自分がよく現れているなあと思わされます。

二二、宮本佳奈

創作　草書　『五言律詩日暮』　2尺×8尺

「牛羊下来久各已閉柴門風月自清夜江山非故園石泉流暗壁草露滴秋根頭白灯」

創作をしました。構成に苦労しました。特に一行目の下部分は、細い線が気が抜けないように注意して書くのが難しかったです。全体の大きな流れを見て下さい。

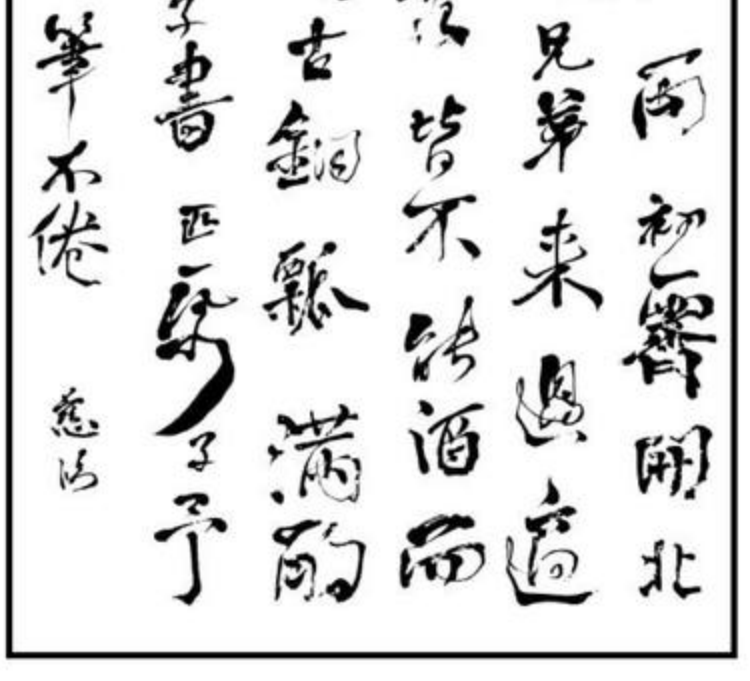


二三、水谷慈

臨書　行書　何紹基『行草山谷題跋語四屏』　全紙

「荊州沙市舟中久雨初霽開北軒以憂涼王子飛兄弟来過適有田氏嘉　問二客皆不能酒而予自賛曰能因濯古銅瓢満酌飲之曰飲此瓢茶書匹紙子予一挙覆瓢因為落筆不倦」

少し詰め込み過ぎかとは思いながら、全紙に六行書きました。もとの作品は二行ずつの四連の作品なので、配置はだいぶ変えてあります。字のサイズや空間の取り方で遊んでみました。線も行も揺らしながらバランスを取ろうと頑張りましたが…やっぱり何紹基のバランス感覚はすごいです。



二四、樫岡大輔

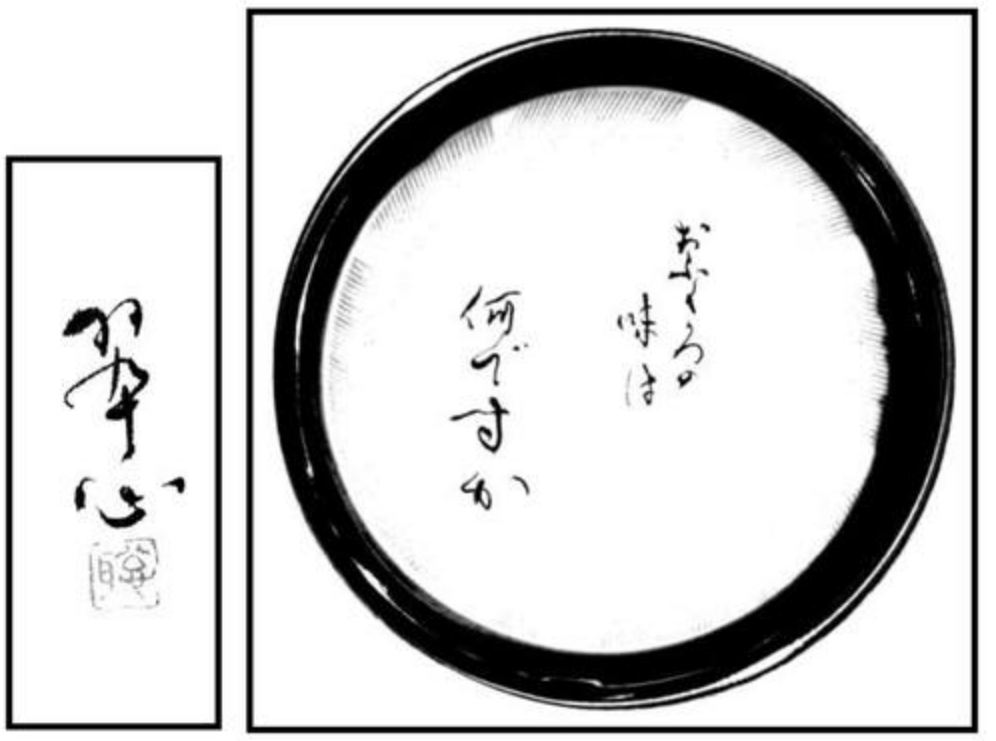
臨書　隷書　王福厂『隷書千字文』　半切×2

「図写禽獣 画采儷霊」

千字文の中から雰囲気の良さそうな八字を選んで書いてみました。微妙な線の感じを表現するのが難しかったです。



二五、北山聡佳
創作　調和体　『日常に生きる書』
直径１２ｃｍすり鉢・すり棒
「おふくろの味は　何ですか」
コンピュータ等の普及により、活字文化が生活に確固たる地位を築いた今、人の手でしか表現し得ない文字の復興を担うのは、書道に携わる私たちの役目です。今一度、生活空間に“ぬくもり”を取りいれてみませんか。



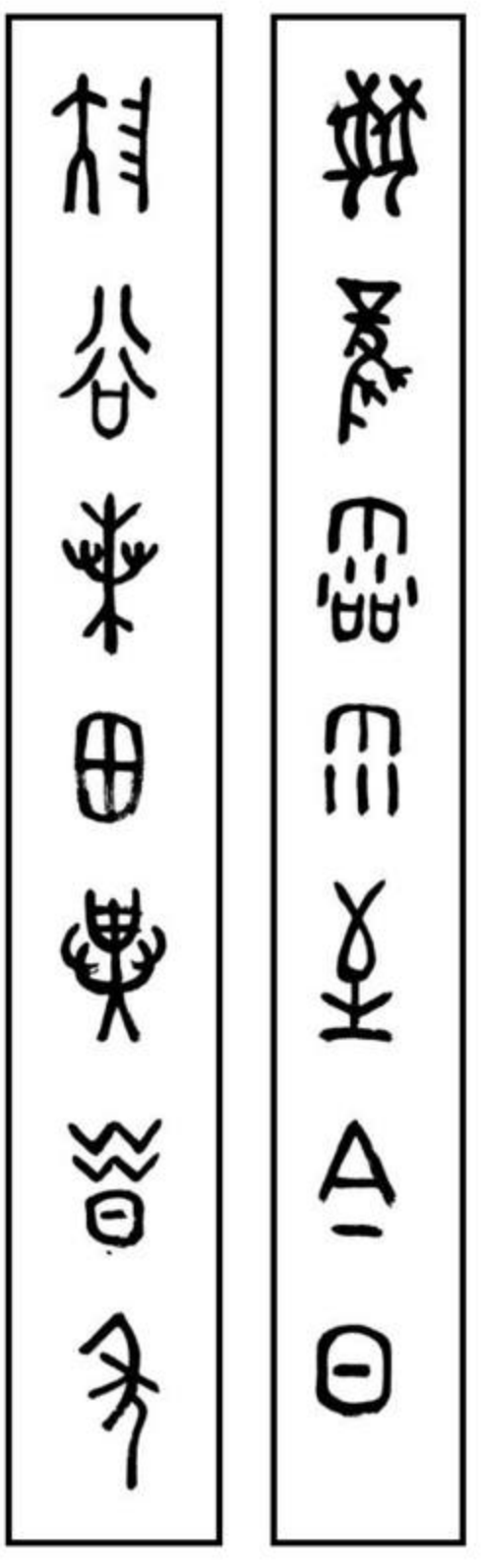
二六、小島千明
創作　行書　『曇天』　半切１／２
「曇天」
私は曇り空に近いタイプの人間だと思うので、重たくて不安定で、泣き出しそうな曇り空を表現したいと思ってやってみました。



二七、得能麻希
創作　調和体　『これが私のお気に入り』　半切１／３×３
「絆の色は十人十色」
「陽はまた昇る」
「困った時は笑っとけ」
唐突ですが質問です。解答に合わせて以下のコメントをお読み下さい。
「この作品の原典を知っていますか？」
ＮＯ　→私の好きな言葉を書いた作品です。上手くはないけど何となく元気が出ると感じていただければ幸いです。
ＹＥＳ→一緒に語りましょう。ちなみに私は銀さんが好きです。



二八、窪田頌
臨書　篆書　羅振玉『甲骨文七言対聯』　聯対聯
「猋風零雨至今日　陵谷桑田異昔年」
甲骨文の収集・整理、敦煌文書の研究など数多くの業績を挙げ、辛亥革命後に日本へ亡命してからは京大東洋学の基礎を築いた清末の大考証学者である、羅振玉の作品を臨書してみました。
学者らしい素直な作品だったのですが、これが上手くまとまらず苦労しました。羅振玉の空間の作り方は、結局わからず仕舞いです。
改めて京大草創期の文化の高さを知ることとなりました。



禅居庵　作品 〜

二九、吉田幸広

臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　半切

「野棠開。無數請陰覆緑苔。意到不嫌山近郭。春歸聊興客登臺。芳墳誰識眞娘墓。水」

文徴明の書は各書体をよくしたが、とりわけ小楷と行書にすぐれた。晩年には黄庭堅風の大書をよくした。

この書は徴明八十八歳の作であり、黄庭堅の書風を受け継いでいる。



三〇、白田全弘

創作　篆書　『氣實則病去』　半切

「氣實つれば則ち病去る」

気力が充実すれば病も治癒する、という意味の言葉です。

昔からよく「病は気から」と言われます。何をするにもまず健康であることが一番大切なので、日常の些細なことでくよくよしない、強いハートを持って生きていきたいものです。



三一、高垣茜

臨書　草書　張瑞図『杜甫飲中八仙歌巻』　半切

「称臣是酒中仙張旭三盃草聖傳」

個性的な字に心を奪われたものの、草書も半切も初めてでてんてこ舞い。半紙と半切の違いを思い知りました。瑞図は明の動乱を生きた強い人、いろんな意味で彼を目指したいです。



三二、小島千明

臨書　楷書　鄭道昭『鄭義下碑』　半切

「父官子寵才徳相承海内敬其榮也」

独特の書体で興味があったのでやってみました。楽しかったです。



三三、河合直樹

創作　調和体　『生』　全紙

「春は花　夏ほととぎす　秋は月　冬雪さえて　すずしかりけり：道元（曹洞宗の開祖）」

京都の風土は実に恵み豊かなものです。確かに夏は猛暑で冬は極寒という過酷な環境でもありますが、景観やそれを包み込む大気は四季折々の魅力を放っています。ありのままの姿を”ありのまま”に見つめるということ、それは容易なようで実は奥深いものなのかもしれません。



三四、西原英臣
臨書　楷書　褚遂良『雁塔』　半紙
「全臨」
部内でも大変人気のある雁塔に初めて挑戦しました。今までよく書いていた北魏の作品とは全く異なる書風を味わう事ができ、楽しく書けました。





三五、春木光平
臨書　行書　趙孟頫『尺牘：入城帖』　半切
「必ず幅を満たし巻を盈たすを要す」
先輩の作品に憧れて挑戦した『半切・行書・一行』。この作品で筆運びの楽しさを実感した一方、己の筆使いの未熟さを痛感しました。



三六、江崎洋平
臨書　行書　董其昌『邵風図詩巻』　半紙
「章皇全盛時尭水湯乾徳不如」
何気なく試し書きをしてみた部分でしたが、書けば書くほど董其昌の筆脈に魅了されていきました。目標とする書の方向性が見えてきた気がします。



三七、吉田幸広
臨書　楷書　柳公権『玄秘塔碑』　半切
「即出嚢中舎利使呑之　誕所夢僧白晝入其室。摩其曰。必當大弘法教。言訖而滅。」
この二年の間、自分はどのように時を過ごし、また何を得ることができたのかを思い返しながら書きました。少しでも成長できていれば良いのですが…。



三八、上野敬峰
臨書　行書　董其昌『菩薩蔵経後序』　半切
「蓋聞義皇至頤精粋止於亀文軒」
「行書と言えば元明清」と勝手に言っている僕からすれば、まさに聖典とも言えるこの董其昌の作品。いかに素直な線で書けるかを追究する良い契機となりました。



三九、水谷慈
臨書　草書　嵯峨天皇『哭澄上人詩』　全紙
「空座香煙読像爐蒼生橋梁少緇」
なめらかだけど力強い線に惹かれて、三筆の一人の嵯峨天皇に挑戦しました。草書ということもあり、また、全紙に三行ということで文字数も少ないため、流れと勢いを大事にしてみました。



四〇、安保智彦
臨書　行書　黄庭堅『黄州寒食詩巻』　半切
「試使東坡或復爲」
初めて行書に挑戦しました。とても難しく、苦労するところが沢山ありましたが、とても楽しかったです。



四一、林玄海
臨書　楷書　虞世南『孔子廟堂之碑』　半切
「微臣属書東觀預聞前史若乃知幾其神」
今回初めて半切の作品に挑戦しました。作品を書いていて、自分の未熟さを痛感しました。これから更に精進して行きたいと思います。

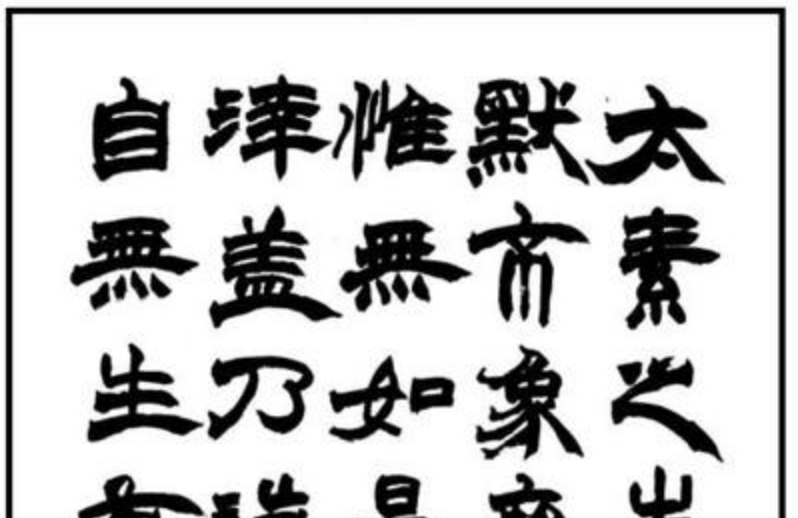


四二、窪田頌
臨書　隷書　『史晨前碑』　全紙
「孔子乾坤所挺西狩獲麟為漢制作春秋以明文命綴紀撰書脩定禮義」
著名な四字を書きたい、というまた不純な動機でここを選んでみました。もう少し字らしいものを書こうと思って隷書を書いてみたのですが、なかなか篆書を抜け出すことができませんでした。
隷書っぽい隷書になったでしょうか？



四三、和田卓也
臨書　楷書　『孫秋生 造像記』　全紙
「大伐の太和七年、新城縣功曹孫秋生、新城」
柄にもなく厳つい楷書に挑戦してみました。字は人を表すとは言ったものですが、それをこんな形で実感するとは…ただ自分の未熟さを痛感しながらも、少しは一つの形としてまとめられたように思います。





四四、西原英臣
臨書　隷書　趙之謙『隷書張衡霊憲四屏』　聯落×4
「太素之先幽清元静寂冥黙不可為象…」
趙之謙の隷書作品に初めて挑戦しました。独特の線質を表現するのに苦労しました。また、作品に重厚感を持たせるために構成等にも少し工夫をこらしました。まだまだ未熟な部分は多々ありますが、ご批評よろしくお願いします。

四五、頓部李歩子
創作　調和体
『Winding Road』　半切1／2
まだ遠くて見えなくても…
聴こえてきますか？　そうです，絢香×コブクロです。好きな歌手であるとともに，今の自分の状況を表現していると感じ，選びました。



四六、春木光平

臨書　篆書　呉熙載『崔子玉座右銘』

半切1／2

「崔子玉座銘。毋道人之短。毋説己之長。施人愼毋念。受施愼毋忘。世譽不足慕。惟仁爲紀綱。隱心而後動。謗議庸何傷。毋使名過實。守愚聖所臧。在涅貴不淄。曖々内含光。柔弱生之徒。老氏戒剛彊。行々鄙夫志。慎言節飲食。知足勝不祥。行之苟有恒。久々自芬芳。」

僕は割と整然とまとまって統一感のあるものが好きですが、この作品ではあえてムラを出して遊んでみました。楷書作品の製作中、一息入れるつもりで取り組んだ作品です。笑



四七、北山聡佳

創作　甲骨文　『私２００９』　半切1／3

「牛」

“牛”の文字は遥か昔、中国で作られました。それはこの作品をご覧の通り牛の頭の形を象りできたものです。一見して分かる象徴から生まれた漢字は、現在に至るまで使用される、文明の偉大な財産です。



四八、水谷慈

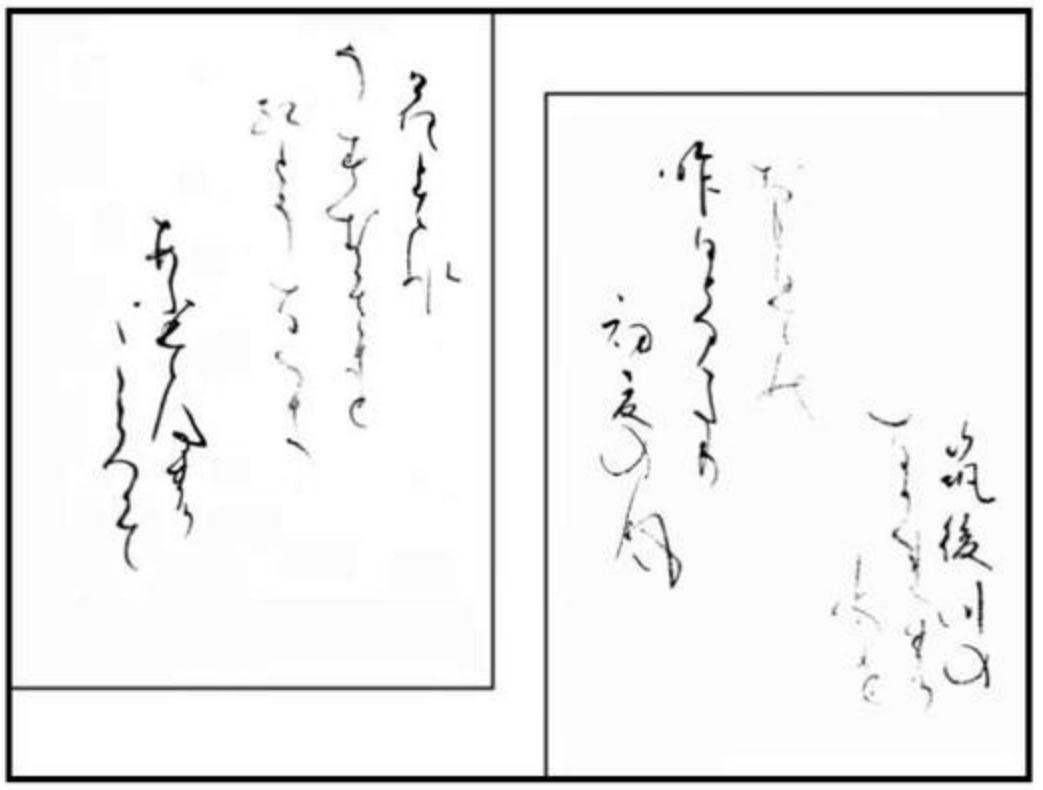
臨書　楷書　欧陽詢『皇甫誕碑』　半切

「刑部侍朗趨歩紫庭光暎朝列折旋」

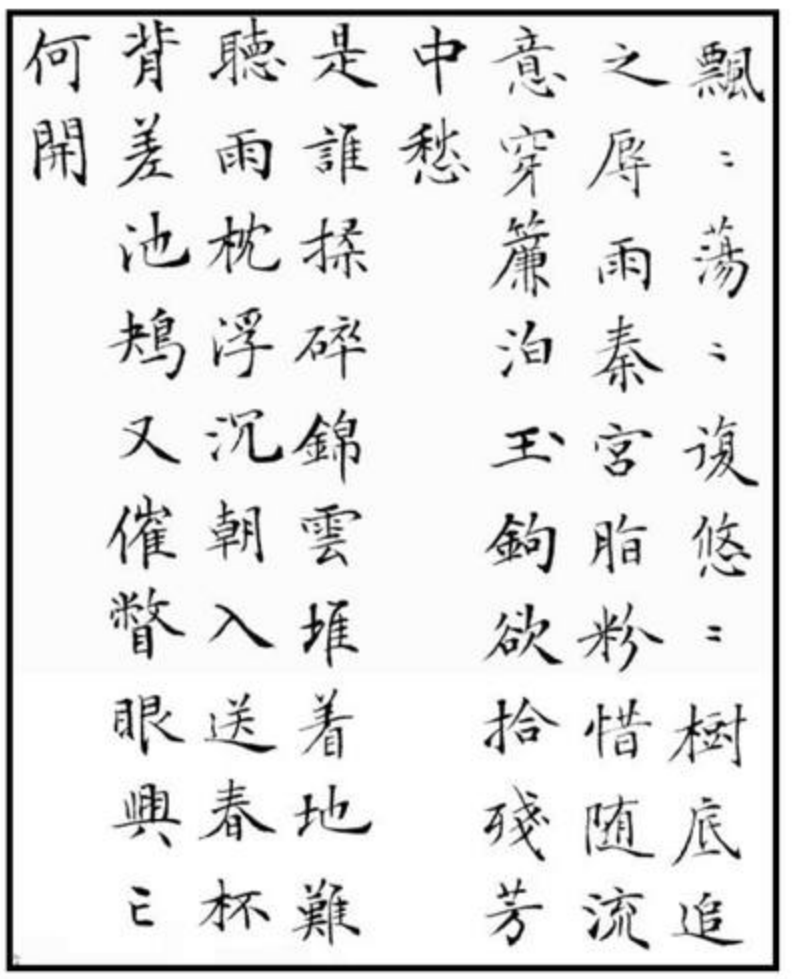
大好きな長峰・羊毛で楷書を書きたい！！と思って書きました。やっぱり楷書は難しい…。線が柔らかくなりすぎないように、でも、きりっとした字になるように、一文字一文字を大切に紙面に並べていこうと頑張ってみました。擦った墨を使って、じっくり時間をかけた作品です。



四九、松永智子
創作　かな　『初夏の風』　ハガキ二連
「筑後川のなかれの水をおもひての昨日と見たり初夏の風」
「花とはなうすむらさきと紅とうなつきあふは何のこころそ」
「筑紫の女王」と称され、情熱に生きた歌人・柳原白蓮（一八八五－一九六七）の歌を創作しました。後に宮崎青年と駆け落ちする白蓮が、「女王」として九州に君臨していた時代に詠ったこの二首に、私は故郷・筑後での青春を想います。流水の如き、風を感じる作品でありますよう。



五〇、春木光平
臨書　楷書　文徴明『細楷落花詩巻』　35cm×405cm
「賦得落花詩十首。沈周。富逞…(全三七一〇字)」
初めての全臨でまだまだ未熟な作品です。“一度くらい挑戦したいな”という想いで取り組んだ今回の作品ですが、心残りとなる点が多いのでまた挑戦したいと思います。



五一、西原英臣
臨書　行書　董其昌『邠風図詩巻』　全紙
「玉書金簡不足異。布帛菽粟眞文字。委苑開先代蔵。詩中盡絵農桑事。憶昔章皇金盛時。尭水湯乾」
董其昌の行書に挑戦しました。細字作品を全紙にまとめるということもあり、構成等かなり苦労しました。それなりにまとめたつもりですが、完成にはまだまだ努力を要する部分もあり、学ぶべき点はまだまだあると改めて実感できる作品となりました。



✦　合作　✦

＊『虹』
前回の秋季書展は１１月だったので、手形で「紅葉」を表現しました。今回の初夏書展は６月開催です。初夏といえばジメジメした梅雨のイメージがありますが、雨があがった後に時折見せる虹はきれいですよね。
そんな虹をてるてる坊主で表現してみました。とはいえ、虹は綺麗でもやはり梅雨は嫌なものです。書展期間中はたくさんのてるてるboys&girls のおかげで晴天が続くのを祈るばかりです。

✦　賛助作品　✦

＊　講師　寺本蒼玄先生
創作
言葉の意味通り自然を風流に味わうという感じで無理なデフォルメもせず自然に書き流した作品です。



This book was
made by the LeME